

美和ダム再開発湖内堆砂対策施設モニタリング委員会（第4回）

指摘事項

1. 運用計画と試験運用計画について

- 操作運用イメージ図は、全開操作に移行する時の流量との関係がわかるよう図示するとよい。
- 試験運用時は、結果に不確実性があることを前提として、濃度が高くなる操作を実施し、現象を把握することが重要である。
- 操作方法（ゲート開度と継続時間の関係）の机上検討では、提示した2山洪水のみならず、1山洪水についても実施しておく必要がある。
- 建設中のストックヤード等の施設そのものに影響を与える可能性がある計画や調査内容については、重点を置いて検討すること。
- スtockヤードに投入する土砂は、毎年一定量を浚渫して投入した方が、効率的に施設が運用できると考える。
- 運用時に下流の濁水濃度が想定以上に上昇した場合の、ゲート操作についても考え方を整理・検討しておく必要がある。

2. 環境影響予測について

- 環境影響予測を行う上で考えるべき濁水現象の評価は、バックグラウンドの変化が前提となる。上流域に存在する斜面の安定化により発生する濁水濃度が低減傾向にある中で、ストックヤードの評価をどのように行うべきか考える必要がある。
- 自動濁度計による濁度観測をなるべく早期から開始し、ダム流入～放流～下流河川への流下による遅れ時間を含めた伝播の状況を把握することが重要である。
- 天竜川からの濁水希釈が少ない場合の天竜川本川への影響を整理すること。
- 過去の調査結果から、バイパスの運用による生物変化をSSや流量と関連付けて整理することで、湖内堆砂対策施設の運用による影響を分析するスキームを整理すること。
- 湖内堆砂対策施設により生物環境に影響が生じた場合に運用計画にフィードバックする仕組みを検討すること。

以上

